

業思想研究

氏家 覺勝

本書はインド・中国・日本佛教における業思想の研究の一大集成である。斯学の權威が一処に会して佛教思想の根幹を形成する「業」をあらゆる角度からとりあげた成果が結集されている。本書の論文には従来の研究では採用されなかった新しい方法や資料が駆使されていることも、本書の価値をたかめている。以下個々の研究を紹介することによって、本書のもつ意義の一端にふれてみたいと思う。

巻頭論文の「インド思想における業の種々相」(雲井昭善氏)は、インド思想史の中で、佛教の業思想がどのように価値づけられるかが論点となっている。第一章では業の語義が1行為としての業、2儀式・羯磨としての業、3業と煩惱・有漏、4業処、5業は物質の五項目に渡って検討されている。このカルマンの語義のうち注意される点は、行為を意味する業が宗教的行為であることであり、そのような業が因果応報説と結びついてさまざまな業説が展開する。その点が第二章の「行為と果報」で詳しく考察されている。つづいて第三章「輪廻思想と業」ではバラモン教の二道説が佛教の業説と対比され、第四章「非業

論と業論者」では宿作因説などの業報否定論者を考察する。第五章「思業と思已業」では身・口・意三業のうち佛教では意業を重視する点がりあげられる。第六章「業異熟と熏習、業遺存」では業遺存(karmāśaya)の術語を介して業の潜在余力を論じ、第七章「共業と不共業」では業の社会性の面を追求し、第八章「末法と業」では有漏業と無漏業とのかわりが論究されている。

「律蔵におけるカルマンの問題」(平川彰氏)では業の用語例の一つである律蔵という僧伽の法律的行為としてのカルマンをとりあげている。このカルマンを漢訳では「羯磨こんま」と音写するが、論者はこれを自然法としてのダルマと比較して、ダルマは不変であるが、人間の制定したカルマの規則は事情によって変更され不変ではない、と指摘している。ところで律蔵の羯磨は多数あり、ここではとくに「遮説戒」がりあげられる。「罪ある」比丘が布薩の出席をどの場合に遮せられるか、また遮説戒をなす比丘の資格は何か、を詳しく論じている。

「原始佛教における業思想」(藤田宏達氏)は、原始佛教の業思想を種々の角度から検討されている。第一節では原始經典にあらわれるおびただしい業の教説の中から因果応報説などの主要な教説をとり出して考察し、業の本質は何かを論じて「意思」であると定義づける。第二節の「業の思想的特色」では業の思想は世間的立場の教説として受け入れられたものであるかも知れないが、それは佛教本来の立場としての縁起・無我の思想と衝突しては説かれない、とする所論に注目したい。第三節

では業と縁起を結びつける業感縁起説が部分的に原始經典にも認められるとし、従来の学説（舟橋博士説）を再検討する方法で新しい見解を示す。それは「勝義の説としての業論」をジャイナ教の業論を援用して一般の業感縁起の業論と見なすべきであるとされる。

「原始經典における業異熟の究明」（玉城康四郎氏）は第一節で業を主体性の根拠としてとらえ、インド思想・佛教の終極目標たる解脱・涅槃を実現するためにこの業の究明が要請される、と説く。第二節の「業のインド的原態」では業が輪廻の基体であり、善因善果・惡因惡果の原則となる点、第三節の「業異熟の基本性格」では業異熟が不可思議なものであり、宗教的主体者にとっての究極の課題である点を考察する。こうして業異熟が深遠で微妙なものであり、しかもそれが人の自体（じん）とて解脱に関わる究極的なものであることを確認して、つぎにその人の自体が具体的にどのような存在に指摘できるかを第四節の「業異熟の所在」とつづく第五節の「究極の課題としての業異熟」で論証せんとする。そこでは二つの資料から業が自己存在を規定し、同時にその存在（人格的主体たる識）の根拠となっている点を論述している。

「佛弟子における出家の動機とさとの様態」（前田慧孝氏）は、三節にわたって佛弟子における出家の動機とさとの契機とさとの関連する宿住智の意味が述べられている。一見直接業論に関係する所論のように見受けられないが、第一、二節の考察で明らかとなり佛弟子たちがさまざまな契機で出家する

背景には、各人の生いたちとか環境・能力さらには過去世の業が深く関わっている場合があり、さとの契機にも同じことがあるから、これも一種の業論と考えられるものと思われる。第三節では三明のうちの宿住智が慧学の内容たりうる、とされ、わが宿住を知らず、業と結果に対する認識なくしてはさとりはありえない、と結論されている。

「優婆塞の五戒について」（舟橋一哉氏）は、優婆塞の五戒に関連する梵文の俱舍論業品とその称友疏との部分訳である。この部分は俱舍論業品において無表業としての別解脱律儀の受持を論ずる中に出るもので、五戒のうちでも（不）邪淫、（不）妄語、（不）飯酒戒の論議が中心をなしている。和訳の本文の中で称友疏が引用する文には側線が施され、称友疏においても俱舍論からの引用文には側線が施されて両者が対照できるよう配慮されている。

「俱舍論」に見える業論（桜部建氏）は『阿毘達磨俱舍論』に説かれる業説を整理されている。まず俱舍論業品の全内容を梵文俱舍論の第四章「業の解説」にもとづいて概説し、ついでその業説の第一のテーマは惑・業・苦の因果、第二に無表業であると述べる。最後に俱舍論の業説が必ずしも説一切有部の所説の忠実な祖述でないことの一端を、二つの俱舍論頌と相当する『阿毘達磨頌宗論』の頌とを比較して検討されている。

「パーバヴィヴェカの業思想」（梶山雄一氏）は、『中論』第十七章「行為と果報の考察」のパーバヴィヴェカ（清升）の注釈である『知恵のともしび』（般若灯論）第十七章をアウ

アローキタヴラタ（観誓）の『般若灯論広注』にもとづいて逐語訳したものであり、序文にそこに出る種々の業思想が、諸註釈の研究の成果にもとづいて解説されている。説一切有部の無表説であるとか経量部の「心相続」説さらには正量部の不失法の理論が取りあげられているが、中でも不失法については豊富な資料にもとづく考察がなされている。不失法は借用書のように心相続に残る、不失法は非刹那滅的である、云々。またそれは見道によっては断ぜられない、不失は修所断である等々。最後に中観の理論によれば、業と果とは佛陀が化作する変化のように実体のない存在で、あるともいえず、ないともいえない。業も果も幻であり夢である。『灯論』の和訳中にはアヴァローキタヴラタの諸見解が多く註記されており、右の序文の解説と合せて本論の業説などの理解により資するところとなっている。

「瑜伽行唯識学派における業の諸問題」（武内紹晃氏）は、唯識学派の諸論書に見られる業説を識転変の理論を中心に考察されている。すなわち第二節でアラーヤ識を根底とした識転変の理論と三性説が唯識教学の特徴であり基盤であるが、この基盤をつらぬくものは転変の論理であるとして、世親の識転変説を『唯識三十頌』を中心として解説する。そして第三節では業種子や業の習気を検討し、第四節では弥勒・無着の論書における三種雑染がとりあげられる。第五節では無着の論典には「悟りへの業」あるいは「佛の衆生教化の業」が多く、それらもまた転変の理によって説かれる、といわれる。

「撰大乘論における業思想の一形態」（片野道雄氏）は、瑜

伽唯識における業の思想を無着の『撰大乘論』を中心に考察されたものである。第一節においては業思想を「縁起の当態であるアラーヤ識の上に展開する」ものと受けとめ、アラーヤ識の三種義を説く『撰大乘論』第一章および『唯識三十頌』にもとづいて、アラーヤ識の刹那展転の生起としての「生起相」と余生への生起としての「雑染相」との二面を説く。第二節ではアラーヤ識の三種義を説明し、第三節では転迷開悟、転識得智の依事とされるアラーヤ識の存在が吟味されようとする。最後に第四節で『撰大乘論』第三十三節の業の雑染に関するアラーヤ識の存在論証をめぐる無性釈が解説されている。

「佛の業と佛性の業」（小川一乗氏）は、佛性思想における「業」を『究竟一乘宝性論』にもとづいて考察されたものである。第一節において佛性思想における業は「解放の業」であると定義し、第二・四節で『宝性論』の二種の業が説明される。

まず「佛性の業」とは、「厭離穢土・欣求淨土」という生死輪廻より解放（涅槃）を切望する心のはたらきであり、その業が誰にでもあるということをもって悉有佛性の根拠とする、といわれる。つぎに「佛の業」の内容は一、*anāhoga*（骨折ることなく、自然）と二、*aprasaṅgha*（休息することなく、不休息）であり、この二語は佛の二大特性としての智慧と慈悲を「業」という面で表明したものと見なされるとする。これらの考察はダルマリンチェンの解説をもとになされ、最後に本論第四章九八偈に対するダルマリンチェンの科文の表を掲げて説明を明確に跡づけている。

「密教における業」（宮坂有勝氏）は、空海の十住心の体系において密教の立場で佛教の業論がどのように位置づけ意味づけられるかという点と、業の具体的形態である三業に関して密教は特有の三密観行を有している点を考察する。第一節では十住心の第一住心より第九住心がとり扱われる。わけても世間三箇住心といわれる第一より第三住心が業の果報としての輪廻転生の諸相を明らかにしたものとしくわしく考察されている。第二節では三業論を基盤としての三密論の考察に移る。三密とは法身の三密であり、その法身と衆生との三密を相応せしめる媒介は加持であるとのべ、最後に三密成佛すなわち即身成佛の実現を目ざすのが密教の面目である、と結論する。

「タイ佛教における業思想」（佐々木教悟氏）は、第一節より第五節において初期佛教における業思想がとり扱われている。これはタイ佛教の業思想が、スリランカ系の上座部佛教を基盤としているためである。第六節では六世紀以降のタイのモン族の国家であるドヴァラティーと説一切有部の佛教との関連を考察する。その中でタイの演劇のラマーンがマノーラーとよばれる説話にもとづいていて、それが有部の律典に出る「スダナクマール・アヴァダーナ」のことである、との事例が指摘される。第七節では今世、来世に善き果報をもたらすために福業を積むべきとする「タン・ブン」の福業思想の紹介と、一般庶民が願うことは「ニッパン」（涅槃）といったものではなくて、現在・未来の幸福の享受であったと説明されている。

「ジャイナ教の業思想」（長崎法潤氏）は第一節で、阿含ニ

カーヤに伝えるジャイナ教の開祖マハーヴィーラすなわちニガンタ・ナータプッタの業説を、四項目に整理して(1)苦行によって古い業を破壊し、新しい業をくい止めること、(2)業滅↓苦滅↓受滅↓一切苦滅「解脱」(3)業、苦、不苦不楽を感受するのは、すべて前に作られたものを因とする、(4)過去の行為の結果生じた悪業を苦行によって滅し、未来に悪業を生じさせないために身口意による防護をする。身口意の行為を業とは呼んでいない、とされる。

つぎにこの佛教徒が伝えるニガンタ・ナータプッタの業説の信憑性を求めて、これらの業説がジャイナの原始聖典中に説かれるマハーヴィーラの業説と合致するかどうかを調査されている。そしてその結果は、いずれの説も両者がほぼ完全に一致するとの結論に到達されている。この考察をふまえて、さらに第二節の「業滅と解脱」では八種の業のすべてを滅することによって聖者の最高の解脱に達することが論ぜられ、第三節の「業思想の展開」では、業とカシヤヤ（穢濁）および物質的な業と精神的な業との関係が追求されている。

「サーンクヤ哲学における業の問題」（村上真完氏）は、「サーンクヤ哲学を中心として業」という点からその哲学を考えてみよう」とされる。「むすび」の要約では、無知により貪欲によって行為（業）が行われ、その業の余力として法・非法が生じ、法・非法によって輪廻に縛せられるが、真実知が生ずれば業の種子たる法・非法が焼尽され、身体脱落の死後に完全な解脱（靈我の独存）に達する、といわれる。

「過去佛思想と聞法宿縁の説」(横超慧日氏)は、第一節で法華經の方便論に方便品を中心とする開三顯一の方便説と寿量品を中心とする佛身本迹説とがあり、後者の久遠本佛思想は、聞法宿縁の信仰の流れから結果したものであらう、とされる。

第二節で方便品以下の八品の中で過去佛に言及する場合三つの立場があったとされ、第一は三世に一貫して変ることなく普遍真実の法であることを示す過去佛をあげる。第二は値佛聞法が最重要であることを示すため、佛となった者でも修行時代にそれを経てきたとして聞法宿縁を説く。第三は値佛聞法により今生において教の完成を見たとする形の聞法宿縁説をとる。この三点が以下の第三・七節でさらにくわしく考察されている。

「観無量寿經における業思想」(水尾現誠氏)は『観無量寿經』(『観經』)の業思想を序文の「清浄業」と正宗分における定散十六観の「淨除惡業」「滅罪」の得益、さらに流通分における「淨除業障、生諸佛前」の經名を検討することによって明かそうとする。第二節で従来「清浄業處」を清浄業の所感のところすなわち淨土とする説を批判される。そして業處を禪定の対象の意、観想の対象としての「佛・菩薩および淨土に関する清浄なる業處」であることをいおうとする。清浄業を法藏菩薩の淨業と解し、清浄業をもって往生を得る者の業とも考えられる、とする。

「初期中国佛教における業論」(古田和弘氏)は、初期の中国佛教の特色や問題点を佛教の業論の理解および展開という面からとらえた論である。第二節で中国における業論の受容形態

を「神不滅論」でとりあげる。神不滅論は輪廻の法則の妥当性を肉体を離れて存続し得る「神」の存在を論ずることによって立証しようとするものである。第三節では慧遠以前の業報論の受容を問題として東晋の戴逵が慧遠に宛てて論難した『釈義論』をとりあげる。ここでは佛教の業報説が人の禍福を合理的に説明されない、と批判される。慧遠の応答は第四節で「世間に見られる行為と禍福の矛盾は三報の差」により、「不合理はすべて限界内の視聽においていえることで、三報の理によれば不合理ではなく、云々」との興味深い問答を示して解説されている。

「日本における業と自然の思想」(田村芳朗氏)は、平安末期から中世にかけての日本の業思想を文学書や佛教書とおして見究めつつ、それが佛教の業論としてどのような思想的特色をもつかを考察したものである。第二節で中世的な日本の業思想・宿業説が平安初期から末期にかけてどのように跡づけられるかを考察し、『日本靈異記』では現報中心であり、他界觀念に乏しい、とされる。前世にポイントを置いた宿業説は平安末期の『往生要集』の地獄と極楽の描写で現実化し、さらに二十年ほど後の『源氏物語』ではその宿命論的色彩が濃厚である、という。ところで自然順応から現実順応では日本人の心情はもとも明るいものであり、来世淨土にしても『源氏物語』のころまでは現世の延長線上に志向された。現世と超越的に救いの淨土が求められるのは末法到来の平安末期まで待たねばならない、とする。

「宿業と宿縁—親鸞の場合—」(藤原幸章氏)は、親鸞の二

種深信の理解をとおして宿業と宿縁の問題を論究したものである。第一節では宿業と宿縁の用法に注意される。親鸞の場合でもこの両語は対蹠的に用いられて、宿業とは宿世の悪しき業因、すなわち宿悪としてのみ用いられ、宿縁とは今日の獲信・遇法の慶びをもたらした宿世の善因縁として仰がれている。ところでこのような理解は善導の二種深信をよりどころとする信心の体験的事実における感知であり、信知である、とされ、第二・三節で機法の二種深信にもとづく親鸞の他力信心の構造をあきらかにする中で宿業と宿縁の本質が浮き彫りにされる。

「因果と善悪」（大屋憲一氏）は、一般に用いられる因果という言葉は科学的法則を意味するとして、第一節で古代より近世にいたる哲学者や科学者たちが、事物の本質あるいは宇宙秩序の基盤となる普遍的法則（自然因果性）をいかように定義し

たかを述べる。第二節でもプラトンのエロースとかその前提となる「魂の不死」を述べ、そのような靈魂不滅説が佛教の立場では否定されることを『ミリンダ王問経』や鈴木大拙の言葉をとおして理解する。ついで第三節で佛教の「因縁」「縁起」説が説かれるが、ここでは因縁を内実とする「業」的な衆生が、「業」を生かすか否かに佛道としての「教理行果」「学行一如」などの行道が立てられるとしている。

以上のように本書は業の広範囲にわたる問題がとり扱われていて大変興味深く、多くの点ですぐれて益せられるところ大なるものがある。今後本書によっていっそう各方面の業の研究が促進されることを念じる次第である。

（昭和五四年二月、平楽寺書店、A5判七九七頁、一二、〇〇〇円）